俳誌「航」に投稿

中山正光（11 組、俳号：前歩）

私が 7 年前から入会している俳句の会俳誌「航」の編集長から投稿の依頼がありましたので、苦心して、【ゴルフ俳句】と題して 12 句を投句しましたところ、3 月号に特別作品として掲載されましたので紹介させていただきます。
これらの句は私の所属している高崎倶楽部のゴルフの集いで、昨年 10 月から 12 月に創句して、同クラブのホームページ(HP)に掲載していただいたものの中から選びました。
これを見た皆さんが一読して、情景が浮かぶようなら大変嬉しく思います。
また、エッセイを説明方々添付していますので、これも是非ご覧ください。
なお、句会「航」は故森澄雄師系の俳句結社で、俳誌「航」は故榎本好宏先生が 2014 年に発行して足掛け 10 年目で、隔月発行されています。句会には数千人の会員がおり盛況で、私は昨年、同人になりました。

・爽やかやゴルフの朝の風頬に
・彼方への放物線よ天高し
・黄落の光の中にボール消ゆ
・身に入むや履きつぶしたるゴルフ靴
・新しき落葉の上を歩きをり
・初霜にボールの跳ねて入りけり
・秋天の先へボールは飛んでゆく
・粧へる山に消えゆくボールかな
・高原は一面すすきすすきかな
・日矢届く遠く近くの木の葉散る
・底冷えやゴルフコースの静かなる
・つかの間の初雪となり晴もどる

63 歳で停年退職後、創句を始めたが、同時期から以前勤めていた会社の高崎工場の仲間 60 人余と毎月 2 回のゴルフプレイを楽しんでいる。「昔の職制を引きずらないこと、全て・・さんで呼び合うこと」が原則で気さくな付き合いだ。平均年齢ははや 75 歳、でも皆元気だ。「高崎倶楽部」という HP を持っていて、ここに毎回のゴルフプレイの写真を掲載しているが、そこに写真に似合った前歩作のゴルフ俳句を載せて貰っている。
仲間内でも、それを楽しみにしている様だ。

（2023 年 3 月 2 日）

以上